

横浜国立大学における中国語履修者を対象とした意識調査

An Attitude Survey of Learners of Chinese at YNU

横浜国立大学 大学教育総合センター

新沼雅代

キーワード：中国語、質問紙調査、履修フロー、選択動機、クラス人数

Keywords : Chinese language, questionnaire survey, registration flow, motivation, class size

Abstract

Class sizes vary a lot among Chinese language courses of YNU. For example, I taught as many as 87 students in the biggest class in Fall Semester in the academic year 2011. In contrast, there were 47 in the smallest one. The average number was 60. I have been wondering how the students of Yokohama National University feel about their learning of Chinese. I conducted a series of questionnaires to my students who registered a Basic Chinese 2a, a required course for freshmen, or a Chinese Seminar, an elective course for sophomores or upper students. The goal of this article is to analyze the results briefly.

As for Basic Chinese 2as, although class sizes are generally considered to be too big, the statistical data show that the students are not disappointed with their classes. Rather, most of them feel some satisfaction. This can be attributed to the fact that they are motivated and active in learning Chinese. However, the students of Chinese Seminars are not so active as those of Basic Chinese 2as. Although YNU provides various types of classes, most of them feel that when they advance to a higher - level class, the level and the difficulty of study have suddenly increased. They also wish to get clearer guidance so that they can choose proper classes.

At the end of this article, I also propose a flow chart that shows how students of Basic Chinese 2as can appropriately choose among my four Chinese Seminar classes.

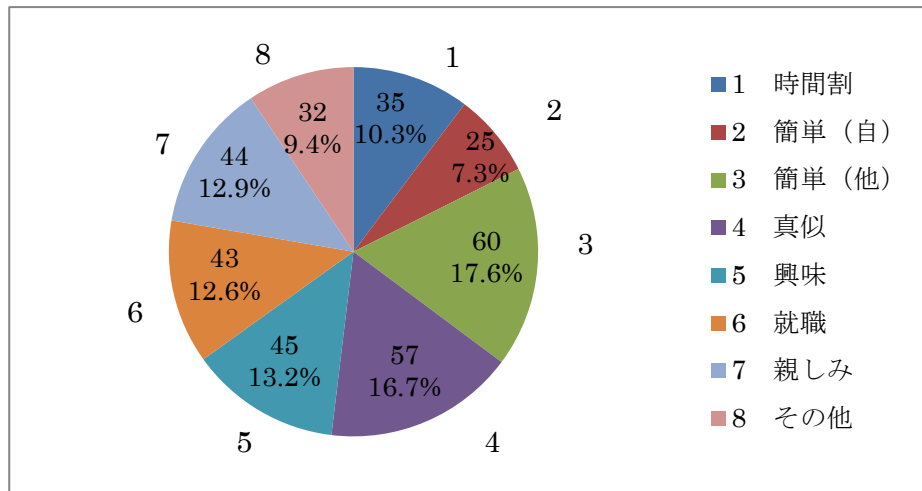
1. はじめに

筆者は、横浜国立大学における教養教育科目の「中国語実習 2a」¹と「中国語演習」の履修者を対象に、中国語学習に対する意識調査を行った。調査方法は、質問紙を用いて行った。調査時期は、2012年2月10～15日で、秋学期の授業内容がすべて終わった時点で調査を行った。本稿は、この調査の結果

¹ 中国語実習は、aとbがある。aは日本語母語話者が文法を中心に教え、bは中国語母語話者が会話を中心に教える。また、春学期と秋学期で1と2に分かれ、年間を通して中国語実習1a、中国語実習1b、中国語実習2a、中国語実習2bの4科目がある。春学期と秋学期は基本的に同じ教員の講義を受ける必要があり、この4科目の単位を取得して中国語演習を履修することができる。

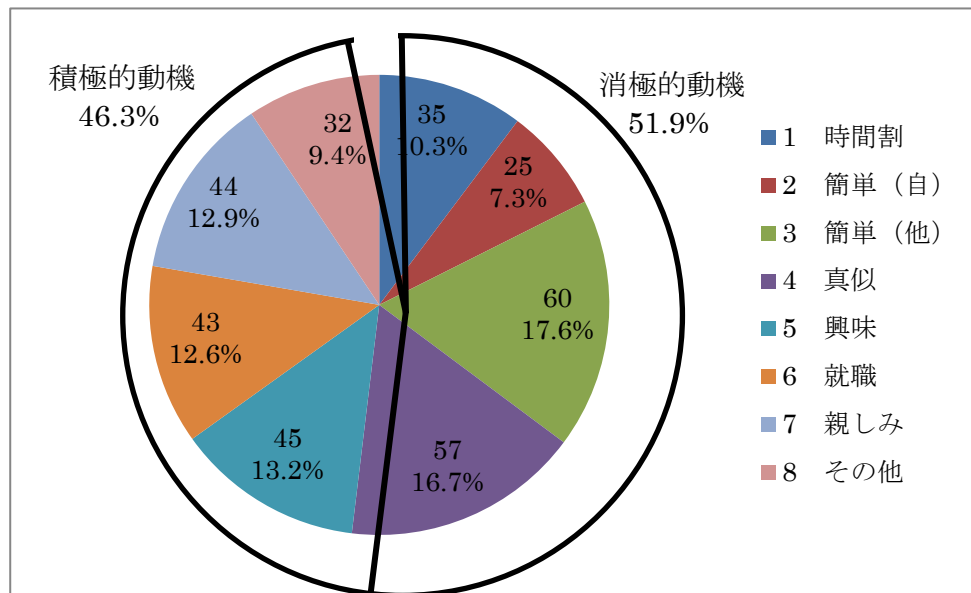
横浜国立大学における中国語履修者を対象とした意識調査 新沼雅代

質問 1 の結果



グラフ 1 選択動機

選択肢①~④を消極的な動機、⑤~⑦を積極的な動機としてまとめると、消極的動機は 51.9%、積極的動機は 38.7%になる。⑧の「その他」は、32名中 22名が「中国語の使用人口が世界で最も多い」、「中国の経済的発展に伴い世界で中国の存在感がさらに強まり、将来的に中国語の必要性が高まる」、「仕事に役立たせたい」などが挙げられていた。他に「卓球が好きだから」、「中国映画が好きだから」、「昔、話せていたから」、「複数の言語の授業に出てみて一番しっくりきたから」というコメントが各 1名（計 4名）あった。この 26名（全体の 7.6%）を積極的動機群に足すと、積極的動機により中国語を選択している履修者は全体で 46.3%になる（グラフ 2 参照）。



グラフ 2 積極的動機と消極的動機

2-2 クラス規模に対する認識

質問 2 では、所属するクラスの数についてどのように感じているかを尋ねた（有効回答数 357）。筆者が担当した 6 クラスの中国語実習 2a は、主に 8 号館の 102・103 教室など約 200 人収容できる教室で行った。教室が広いため、履修者には必ず半分より前方の席に座らせた。授業は、プロジェクターを

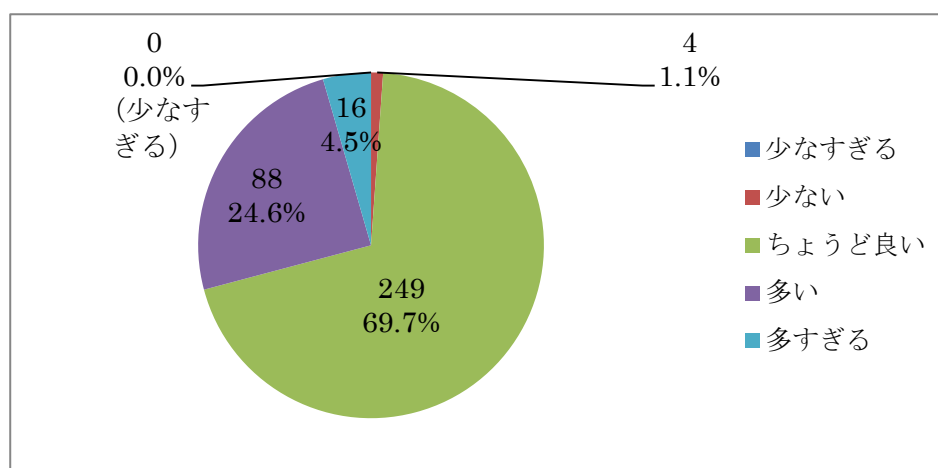
横浜国立大学における中国語履修者を対象とした意識調査 新沼雅代

使い、教科書をスキャンしたものをスクリーンに映し、ペイントでマーカーを引くなどして、教科書のどこをやっているかを学生に分かりやすくする工夫をした。また、副教材のプリントを配布し、それと同じものを重要な個所を伏せた状態でスクリーンに映し、説明を加えながら順次伏せた個所をめくり、その重要な個所をプリントに書き込んでいくという作業を行わせた。必要に応じてスクリーンを上げて板書したり、指名した履修者に問題の解答を黒板に書かせたりした（この授業の方法について、最後の自由記述欄で「分かりやすい」、「見やすい」など、この授業の方法を好ましいと感じている意見と、「すべて板書がいい」、「小さい教室の方が集中できる」など、この授業の方法を好ましくないと感じている意見が挙げられていた）。このような方法で授業を進める中で、履修者は自分が所属するクラスの数についてどのように思うかを尋ねたのが次の質問2である。

(2)質問2 クラスの人数についてどう思いますか？

選択肢 ①少なすぎる ②少ない ③ちょうど良い ④多い ⑤多すぎる

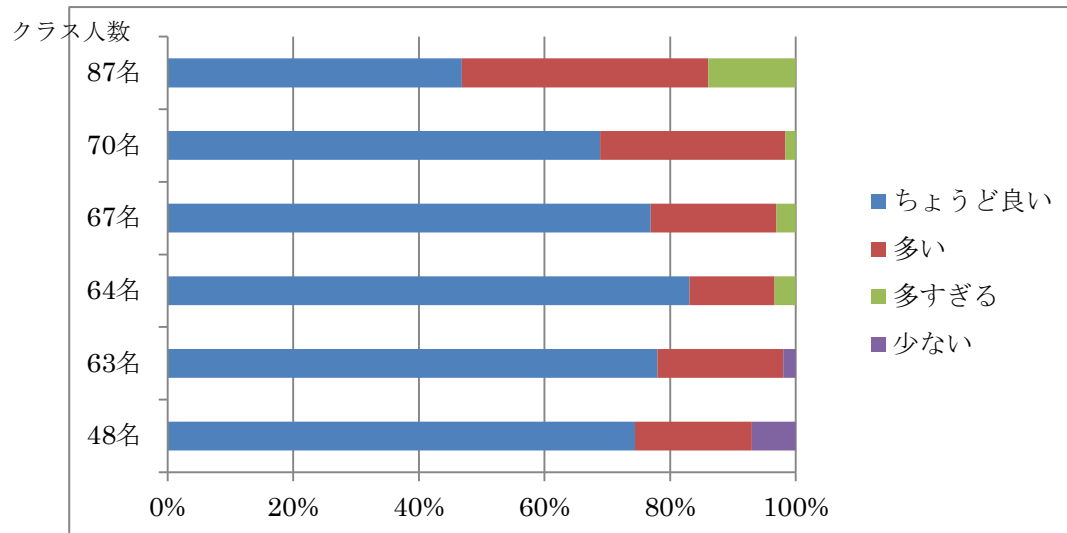
質問2の結果



グラフ3 クラス人数に対する認識 (6クラス合計)

グラフ3から分かるように、357名中の7割弱がクラスの数「ちょうど良い」と回答している。質問2に対するクラス数別の回答を、次のグラフ4に示す（選択肢①「少なすぎる」は選択数がゼロだったため、グラフ4に示していない）。

横浜国立大学における中国語履修者を対象とした意識調査 新沼雅代



グラフ 4 クラス人数に対する認識 (クラス人数別)

クラス人数が48名から70名の5クラスをみると、履修者数が語学学習において一般的には多すぎるとされる人数であっても、授業を行う方法が教室の大きさや設備などの条件と合っている場合、履修者は「ちょうど良い」を選択する傾向にあるということが、グラフ4から分かる。つまり、この質問2は、グラフ内左端に示した人数のクラスで授業を行うのに、筆者が用いた授業の方法と教室の大きさや設備が合っていたか、ということ問うていることになり、所属しているクラスの人数が語学学習に効果的な規模だと思いかどうかを問うことになっていない。

授業を行う方法が教室の大きさや設備などの条件と合っている場合、履修者は「ちょうど良い」を選択する傾向にあるとはいえ、87名のクラスになると、「ちょうど良い」を「多い」と「多すぎる」の合計が上回る。すなわち、筆者が用いた授業の方法は、人数的限界が71~87名の間にあると考えられる。

質問紙最後の自由記述欄は、全部で24名の回答があった。このうち、8名が教室の大きさや人数について書いていた。質問2で「ちょうど良い」と回答しながらも、自由記述で「教室が大きすぎる」(2名)、「人数が大きすぎる」(1名)と回答した者がいた。このことから質問2には、履修者が授業の方法と教室の条件が合っているかどうかを答えていて、所属するクラスの人数が語学学習に効果的かどうかを答えていない場合があることがうかがえる。

また、質問2で「多い」と回答し、自由記述で教室の大きさや人数について回答した者が3名おり、具体的には、「できれば少ない人数で濃く勉強したかったという気がする」、「人数は多いと思うが抽選のない中国語は貴重なので続けてほしい」、「春学期の(実習)1aの時の人数くらいで小教室の時のほうがよかった」というものだった。さらに、質問2で「多すぎる」と回答し、自由記述で教室の大きさや人数について回答した者は2名で、具体的な記述内容は、「春学期にくらべて秋学期は授業中うるさい人などが多くて授業の環境は良くないと感じた」、「(実習)2a・2bともに、授業の人数が多すぎると感じた。言語の授業においては、少人数にして一人の生徒に多く発言させる方が効率的にも良いと思う。希望通りの教員にならないが定員を少なくすべき」というものだった。このように、授業の方法と教室の条件を関連させて質問2に回答するのではなく、クラスの人数と学習効果を関連させて質問2に回答している者がおり、彼らの中国語の学習動機の強さがうかがえる。

横浜国立大学における中国語履修者を対象とした意識調査 新沼雅代

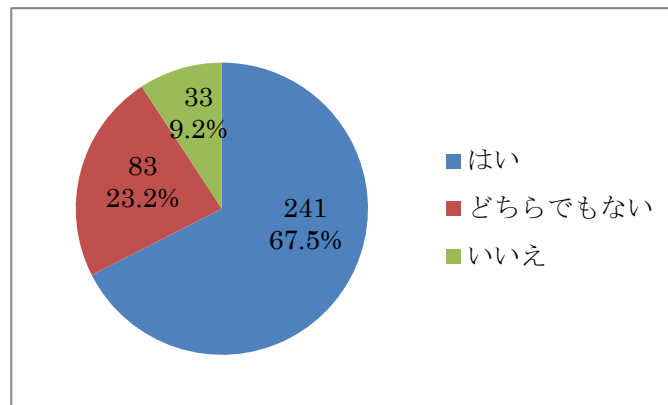
2-3 クラス人数に対する認識別言語学習に関する興味

質問 3 では、言語を学習することに興味があるかどうかを尋ねた（有効回答数 357）。結果を示した下記のグラフ 5 から分かるように、中国語履修者のうち言語を学習すること自体に興味のある者は多い。なお、中国語を選択した動機を尋ねた質問 1 では、「純粋に中国語に興味があったから（選択肢⑤）」と答えた者は 341 名中 45 名であった。

(3)質問 3 言語を学習すること自体に興味はありますか？

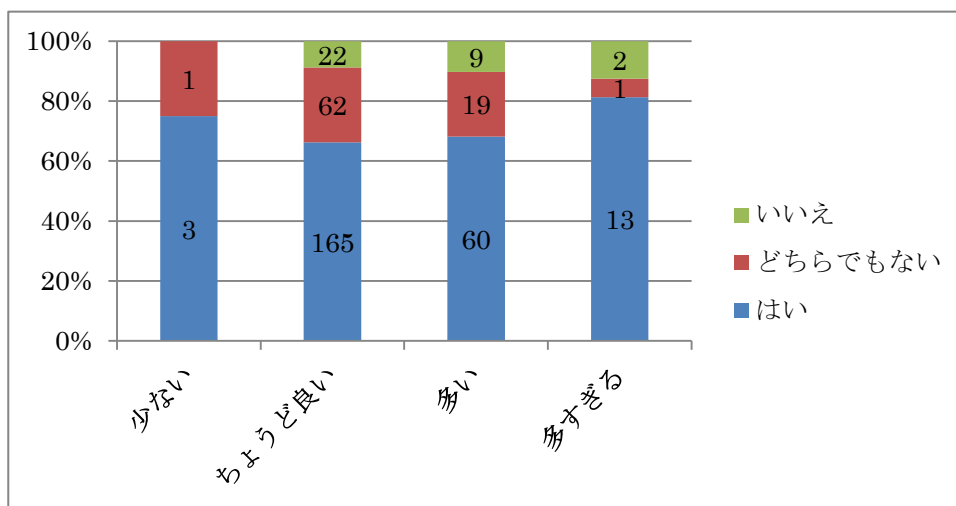
選択肢 ①はい ②いいえ ③どちらでもない

質問 3 の結果



グラフ 5 言語学習に対する興味の有無（6クラス合計）

質問 2（クラス人数に対する認識）の回答別に、質問 3（言語を学習すること自体に興味があるか）の回答をまとめると下記のグラフ 6 になる。



グラフ 6 言語学習に対する興味の有無（質問 2 の回答別）

クラスの人数に対する認識がどのようなものであるかに関係なく、多くの学生が言語を学習すること自体に興味を持っていることがグラフ 6 から分かる。外国語学習にとって一般的には多いとされる 48～63 名のクラス人数に対して「少ない」と回答した 4 名については一旦差置き、「ちょうど良い」、「多い」、「多

横浜国立大学における中国語履修者を対象とした意識調査 新沼雅代

すぎる」と回答した者のうち、言語学習自体に興味があると答えた者の割合を見てみると、「ちょうど良い」が 66.3% (249 名中 165 名)、「多い」が 68.2% (88 名中 60 名)、「多すぎる」が 81.3% (16 名中 13 名) である。このことから言語学習に興味のある学生ほどクラス人数が多いと感じていることがうかがえる。

2-4 中国語実習 2a のまとめ

筆者が平成 23 年度秋学期に担当した中国語実習 2a (計 6 クラス) の履修者で、質問紙に回答した 357 名 (質問 1 の有効回答数は 341) のうち、44.9% が積極的な動機で中国語を選択し、51.9% が消極的な動機で中国語を選択していた。一方で、357 名の 67.5% が言語を学習すること自体に興味があると答えた。クラスの規模は、授業の方法と教室の大きさや設備を関連づけ、両者が合っていれば、クラスの人数が一般的に語学教育には多すぎるとされる人数でも、多くの履修者は「ちょうど良い」と回答する傾向にある。また、学習効果の面からクラスの人数が「多い/多すぎる」と答えた学習動機の強い履修者がいる。

3. 中国語演習

中国語演習は、春学期と秋学期に開講される半期ごとの教育教養科目である。平成 23 年度秋学期に筆者が担当した中国語演習の履修者は 127 名で、質問紙調査に回答した者は 115 名であった。中国語演習は、学生の希望を満たすために、会話や HSK³ 対策など様々な内容の講義を用意している。筆者が担当した中国語演習の内容は、ビジネス・レターを中心とした書面語の文章を読むものと、中国語検定の準 4 級から 3 級までの内容を扱う検定対策であった。質問紙は、多肢選択項目、中間的選択肢を含めた正誤項目、5 段階のリカート法、中間的選択肢を含めた 4 段階のリカート法で、4 つの質問項目 (4~7) と最後に完全な自由記述欄を設けて作成した。また、単一選択の質問項目で複数選択していたり、無回答であったりするものがあつた。これらは回答数に含んでいない。よって質問項目によっては回答数の合計が 115 に満たないものがある。

3-1 受講時の気持ち

質問 4 は、中国語演習を受講する際どのような気持ちで臨んでいたかを尋ねた (有効回答数 114)。質問 4 の質問内容と選択肢、結果は以下である。

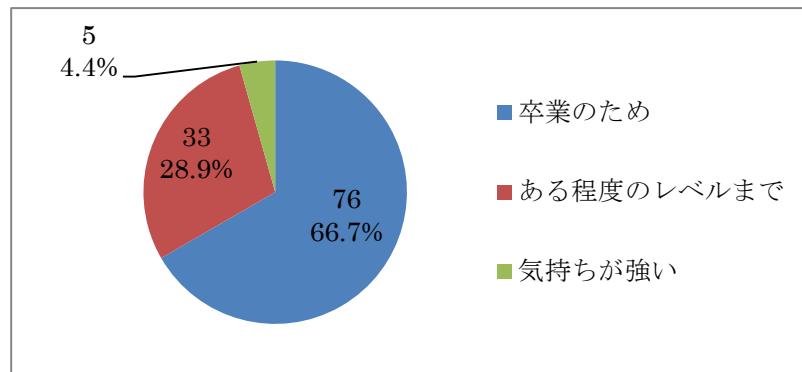
(4) 質問 4 中国語演習を受講するにあたって、気持ちはどれに近かったですか？

- 選択肢 ①卒業のためとにかく単位が必要である
 ②どうせやるならある程度のレベルまで身につけたい
 ③中国語を勉強したい気持ちが強い

³ 中国政府公認の中国語検定で、“汉语水平考试 Hànyǔ Shuǐpíng Kǎoshì” のこと。

横浜国立大学における中国語履修者を対象とした意識調査 新沼雅代

質問 4 の結果



グラフ 7 受講時の気持ち

グラフ 7 から分かるように、履修者の多くが卒業のために単位が必要だからだと回答した。ただし、この質問 4 の選択肢にはバイアスがかかってしまっている。学生の誰もが卒業するために単位が必要である。選択肢①と②③の間には距離があり、それを埋める選択肢が無い。選択肢①②③にあてはまらない者は、①を選ばざるを得ない。つまり選択肢①が多く選ばれるのは当然だと言える。質問 4 については、例えば「その他」といった項目を選択肢に含めるべきであった。質問 1 の回答結果は参考にはなるが、バイアスがかかったものであることを指摘しておく。

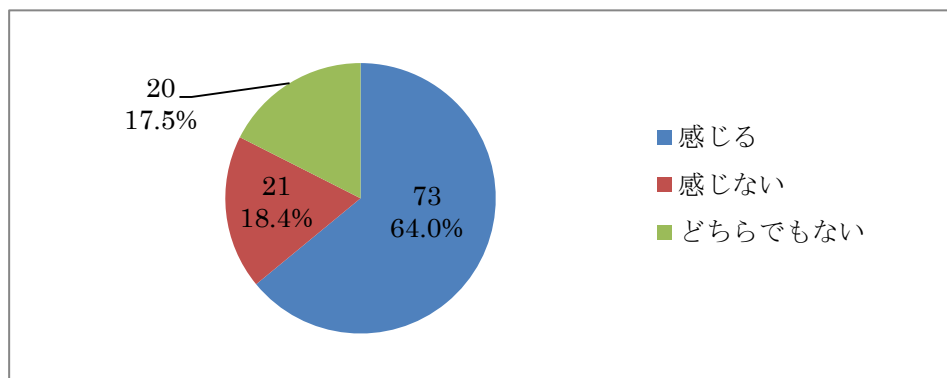
3-2 中国語実習と中国語演習のつながり

1 年次に中国語実習を履修した学生は、2 年次以降に中国語演習を履修する人が多い。質問 5 では、中国語実習を終え、中国語演習の内容を学習していくにあたって、スムーズに学習していけるかどうかを尋ねた（有効回答数 114）。質問内容と選択肢、結果は以下である（なお、演習では a（文法）と b（会話）の区別はなくなり、文法と会話の総合的な中国語の能力が求められる）。

- (5)質問 5 中国語演習は、中国語実習に比べ内容のレベルが急に上がると感じますか？（言い換えると、「中国語実習 a・b を終えただけでは、中国語演習をクリアできる力が身に付かない」と感じている。）

選択肢 ①感じない ②感じる ③どちらでもない

質問 5 の結果



グラフ 8 レベルの急な上昇（実習から演習へ）

横浜国立大学における中国語履修者を対象とした意識調査 新沼雅代

中国語演習には中級と上級が設けられている。学生が各講義のシラバスを見て、それぞれに合った講義を選択できるようにしている。平成 23 年度秋学期に筆者が担当した講義はともに中級である。結果的に履修者の 64%が、演習は実習の学習を終えただけではクリアできないと感じている。これには次の原因が考えられる。まず、1 年次秋学期に実習 2a・2b を履修し、約二ヶ月間の春休みを過ごす間、多くの学生は実習 2a・2b で到達したレベルを翌春まで維持できない。学生の中には実習を 2a・2b を終えてから演習を受講するまで時間が半年や 1 年空く者もいる。このような場合、実習で習った学習内容のほとんどを忘れてしまっており、演習の内容についていけない。次に、実習は多くの教員が担当しており、演習を受講する時点で中国語に関する既習項目にずれが生じてしまっている。これには本学の中国語教育における「初級（実習）」と「中・上級（演習）」の定義が明確でないことが理由のひとつに挙げられる。具体的にいうと、初・中・上級で最終的どのようなレベルに達するのか、どのような学習項目を学ぶのかがレベルによって定められていないということである。

3-2-1 実習から演習への円滑な移行

質問 6 は、上述の質問 5 に関連して、「中国語実習を終え、中国語演習をスムーズにクリアしていけるようにするために、どのような良いアイデアが考えられますか？」という質問で自由記述を設定した。この質問には 62 の回答があり、実習と演習のつながり全体について述べていたものは 14 あった。具体的には、「演習を中国語実習の続き或いは応用のようなものにする」、「実習と演習を続けてとる」、「教員は学生の進行具合を正確に把握する」、「可能であれば同じ教員の授業を受講する」、「休み中に課題等で中国語に触れるようにする」、「演習が始まって 2 回くらいは総復習のようなものを行う」などが挙げられていた。また、「実習で一通り教科書を終わらせるようなプログラムを組む」、「実習のレベルを上げる」という意見もあった。

以上のコメントを参考にすると、日常の授業で最も実行可能なことは、演習において実習の復習を行うことだと思われる。この復習は既習内容を「思い出させる」ことと既習内容の「足並みを揃える」という機能がある。しかし、15 回の授業で復習に充てることができる時間は少ない。実習において学習内容が統一され、実習 2a・2b の終了時において最終的に進度の調整がなされていれば、演習で行う実習内容の復習は、「足並みを揃える」ことではなく、「思い出させる」ことを行えばよく、より効率的であると考えられる。

3-2-2 実習における学習内容の統一

実習において学習内容を統一する方法は、まず、(実習 a で一冊、実習 b で一冊というように) 全ての教員が同じ教科書を使うことが考えられる。大学で使用することを目的とした市販の中国語の教科書は、非常に多くある。教科書はそれぞれに特色があり、授業の進行を考えた工夫がされている。現在中国語実習では、内容が適切で、かつ自分の授業のスタイルに合う教科書を、各教員が選んで使用している。教科書を統一することは、学習内容の統一を容易にするが、教員が自分にあったスタイルで授業を行うという点を制限してしまう。さらに、中国語の文法用語についても原語を使っているか、英文法などで使い慣れているものを使うか教科書によって異なっている。この点も教科書を選択する際の基準となる。具体的には次のような点が挙げられる。中国語において動詞のすぐ後ろにある名詞成分をすべて

横浜国立大学における中国語履修者を対象とした意識調査 新沼雅代

目的語と呼ぶのは適切ではない。例えば、“下雨了 xià yǔ le (雨が降った)”は、“下(降る)”という動詞の後ろにある“雨(雨)”は動作の影響を受けるものではなく、動作の主体なので、目的語とするより、原語のまま賓語(中国語学の術語で“賓語 bīn yǔ”)と呼ぶべきであるが、学習者に分かりやすくするために目的語と呼ぶ教科書が多くある⁴。加えて、教員によって試験問題の難易度が異なると公平ではないため、期末試験問題を統一する必要があるが出てくる。厳密には授業内に小テストを行うかどうかも統一しなければならなくなる。以上のことから、教科書を統一することは学習内容の統一を容易にするが、他の問題を引き起こしてしまうと考えられる。

教科書の統一ではなく、他の方法で学習内容を統一するには、中国語教育学会による『中国語初級段階学習指導ガイドライン』⁵に準拠した教科書を選ぶことである。このガイドラインには導入する文法事項と語彙が明示してある。実習を終える時点で、ガイドラインの挙げる文法事項と語彙が学習されており、これらを聞き取って発音できる力が履修者に培われていれば、同じレベルで演習に臨むことができる。ガイドラインに準拠していない教科書を使用する場合は、ガイドラインの挙げる文法事項と語彙を網羅するように配慮すればよいと考える。ただし、本ガイドラインのいう初級段階とは、大学の第二外国語で毎週2回(各90分)を2年間学習(合計240時間)することを指している。よって本学の中国語実習(1年間)はガイドラインの半分の学習時間にあたり、ガイドラインをそのまま適応できるとい訳ではない。本学の中国語教育には『中国語初級段階学習指導ガイドライン』などを参考に、本学における初級(実習)・中級(演習)・上級(演習)の独自の目安を設定することが急務である。

3-2-3 レベル別クラス分け

中国語学習に対して色々なモチベーションの履修者がクラスに混在していることが、ここまでの調査結果からより明らかになった。色々なモチベーションの履修者がいるクラスで授業を行うことは難しいが、高いモチベーションの履修者を落胆させてしまうことは避けるべきことである。そこで、実習の成績に基づき演習でクラス分けをすることについて尋ねてみた。それが次の質問7である。

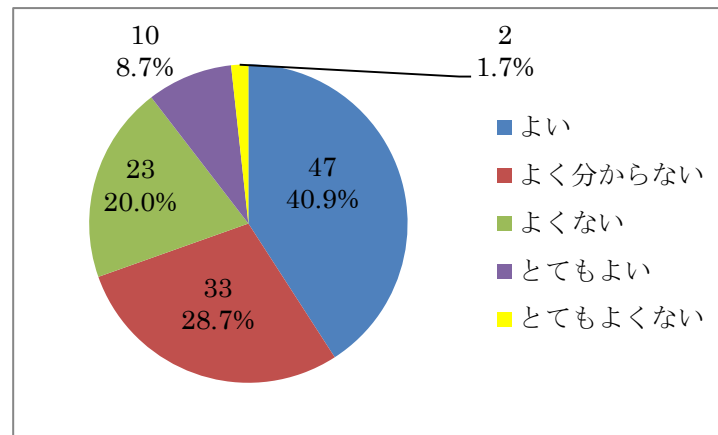
(6)質問7 中国語演習で中国語実習の成績に基づいたレベル別にクラス分けをするのはどうですか？

選択肢 ①とても良い ②良い ③分からない ④良くない ⑤とても良くない

⁴ 中国語で、動詞の後ろの名詞成分を目的語と一律に呼ぶと、繫辞動詞“是 shì”の後の、英語で言えば補語にあたるような名詞性成分も目的語と呼ばなければならなくなる。例えば“我是大学生 wǒ shì dà xué shēng (私は大学生です)”の“大学生”を目的語とすることになる。また、中国語学で言う補語は、英語学の補語とは異なるため、同じ術語であるが指すものが異なると学習者はかえって混乱してしまう。賓語は、動詞との意味関係によって14種(『汉语动词用法词典』)に分類される。「賓語」を用いれば“下雨了”の“雨”は動作主を表わす賓語、“我是大学生”の“大学生”は主語の属性を表わす賓語だと説明することができる。

⁵ URL <http://www.jacle.org/storage/guideline2.pdf>

質問 7 の結果



グラフ 9 成績別クラス分け

質問 7 は上記の選択肢の他に、自由に記述する欄を設け、理由を書かせた。「とてもよい」と回答した者のうち、その理由として「中国人教員の会話の授業でレベルがバラバラで教員も授業が大変そうだったため」、「レベルの合わない学生がいることで講義の流れが止まるのはよくない」というコメントがあった。「よい」と回答した者のコメントには、「やる気により実力が違いすぎる」、「(授業内容に)ついていけなかったから」、「帰国子女の人はレベルが違いすぎるから」、「(クラス分けをするなら)統一テストをすべき」というものが挙げられた。「よく分からない」と回答した者のコメントには、「上級者には良いかもしれないが自分の興味のある授業をとれなくなるのは好ましくない。英語と違って1年だけでは(成績の)明らかな差に出ないと思う」、「教員によって評価基準も違い、実習の成績ではレベルが分からない」、「学生側にもある程度の選択権があればよい」、「自力不足だが頑張っについていこう、単位がとれればよい、この時限に授業をとっておきたい」などの学生側の思惑が反映されないのは良くない、「やる気のある人は嬉しいだろうが、やる気があっても言語の得意でない人もいるため」というものが挙がっていた。「よくない」と回答した者のコメントには、「好きな時間の授業をとることができなくなってしまったため」、「(良くないがただし)実習のテストが同内容・同時限に行われるならば良いと思う」、「学びたい内容の選択が無くなるから」というものが挙がっていた。「とてもよくない」と回答した者のコメントには、「教員ごとに成績基準が異なり実力が成績に反映されない」、「教員ごとに特色をつけて、受講生がその色をみて選ぶことが良いと思うから」というものが挙がっていた。

つまり、演習でレベル別のクラス分けを行うには、実習で学習内容を統一し、かつ統一試験を行うことや、専門科目と時間が重ならないように演習の曜日や時間帯を調整することが必要になり、現時点においては実現が難しいと思われる。

3-3 演習の履修フロー

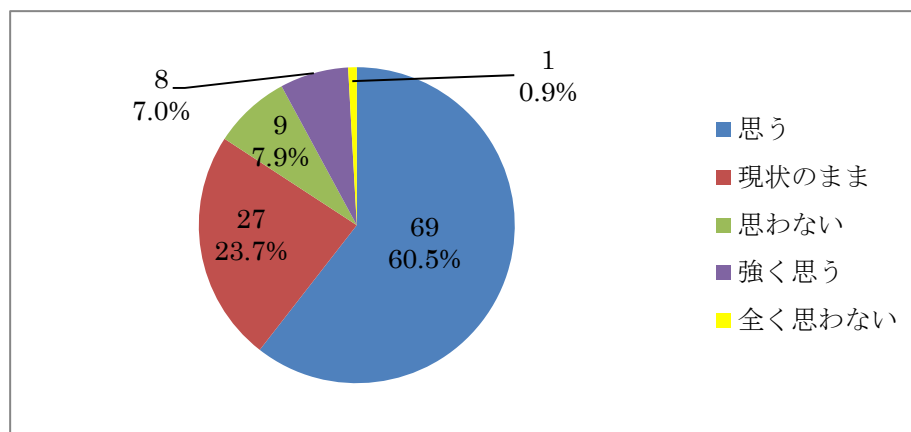
質問 8 では、中国語演習は実習からの続きになるようにある程度履修の流れを示した方が良いかどうかを尋ねた(有効回答数 114)。

横浜国立大学における中国語履修者を対象とした意識調査 新沼雅代

(7)質問 8 中国語演習は、内容的にバラエティーに富んだものを揃えるよりも、中国語実習から続く一貫したカリキュラムのように、ある程度履修の道筋を示した方が良いと思いますか？

選択肢 ①強く思う ②思う ③現状のままで良い ④思わない ⑤全く思わない

質問 8 の結果



グラフ 10 実習と演習を一貫したものに

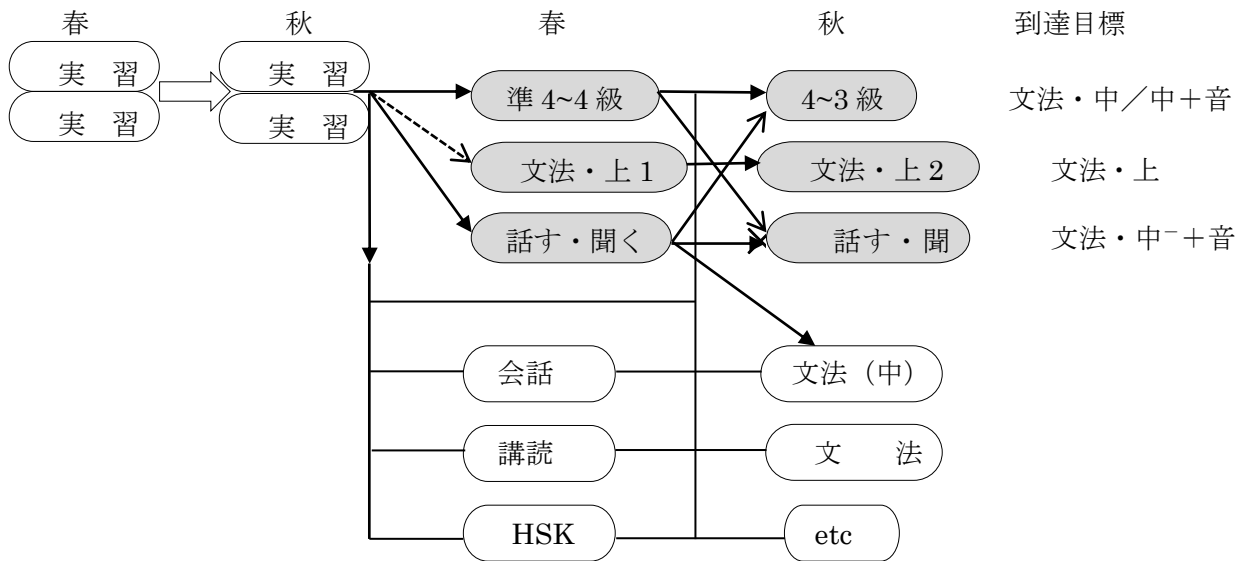
グラフ 10 から分かるように、6 割の履修者が「思う」と回答している。このことは、(筆者が担当した演習において) 実習から演習に変わるとレベルが急に上がり、学習に困難を感じていること(グラフ 8)と、学生が演習を選択する際に、中国語のレベルに関して参考にする情報が少ないと感じていることを表している。

また、履修者にあったら良いと思う演習の講義内容を自由に記述させたところ、以下のものが挙げられた。a.会話、生徒同士に話させる、b.少人数による授業(ディスカッションや発表など)、c.日常会話中心の演習、d.直説法による会話、e.中国映画・ドラマを見る、f.留学生とトーク、g.ビジネス向けの読解、h.中国の文化的なものを学ぶ、i.中国語のドリル、j.年内に中国語検定〇級を取得などのノルマ。平成 23 年度秋学期に f と j は開講されていないが、これ以外の内容を扱っている演習が存在することから考えると、多くの学生はシラバスをよく読んでいないこと、また、中国語で会話をするのにかなり積極的であるということがうかがえる。

(筆者が平成 23 年度秋学期に担当した) 中国語履修者の動機は様々であるが、ここまでの調査結果から、彼らの 6 割が実習と演習のつながりが良くないと感じており、かつ履修のある程度の筋道を示してほしいと感じていることが分かった。平成 23 年度に筆者が担当した実習を履修した学生のうち 24 年度に演習を履修する者が多くいると考えられる。そこで、24 年度に筆者が担当する演習を実習の延長にあるものとして講義内容を設定した。また、演習は筆者の他にも担当する教員が複数おり、それぞれに特色のある講義を行う。よって、演習を実習から一つの流れの上にあるものとして履修することも、各自の興味に応じ、自由に選択することもできるようになっている。このことを次の図 1 に表した。図中の楕円は科目名或いは講義内容を表わしている。色のついた楕円は筆者が担当する中国語演習を指している。実習から演習の履修の流れを各矢印で示す。なお、他の教員の演習内容は仮に設定したもので、平成 24 年度の実際の講義のコマ数や内容を反映したものではない。また、必ず図 1 のように履修しなければならないということではない。ただし、実習 1a・b、2a・b を終え、次学期に中国語演習を履修

横浜国立大学における中国語履修者を対象とした意識調査 新沼雅代

することが前提である。



矢印の説明

- △▷ B : A を履修するなら B も履修しなければならない。
- ▶ B : A を履修するなら B を履修することが望ましい。
- ▷ B : A を履修して B を履修するにはレベルに差がある。
- ✕▶ B : A を履修したら B を履修することができない。
- ▷ B : A を履修したら B を履修するのもよい。

図 1 演習の履修フロー

筆者が担当する演習のうち、「準 4~3 級」、「4~3 級」とあるのは中国語検定の級で、実習を初級レベルとするなら「準 4~4 級」はおおよそ中級マイナスのレベル、「4~3 級」は中級レベルである。中国語検定の各級に合格する力をつけることを目標とする。中国語は、多く印欧語を研究の対象としてまとめられた西洋的な言語の考え方や、或いは日本語学の文法用語や考え方は解釈しきれない場合が多い。「文法・上 1」、「文法・上 2」は中国語学の基礎的な考え方を身につけることを目標とし、「スキップ履修」⁶の学生や、帰国子女、親が中国語母語話者である学生などを対象にしている。このように、中国語の履修フローを学生に提示することで、彼らは履修の計画を立てやすくなる。さらに、学生は自分の中国語レベルに応じて中国語学習を進めることができ、順調に単位を取得していくことができる⁷。

中国語の学習では学習項目が多い。学習する「漢字」、「(語レベル以上での) 意味」、「発音」、「ピンイ

⁶ スキップ履修とは、入学時にすでに一定の中国語力がある場合、中国語作業部会に申請し、審査を経て認められれば、実習からではなく、演習から履修することができる制度である。

⁷ 様々な内容・レベルの演習を設定することにより、評価の不公平の問題が生じる。例えば、中級レベルの演習で「優」の評価を得た学生と、上級レベルの演習で「良」の評価を得た学生では、前者の中国語能力が後者より高いとは限らないが、最終的な成績評価として前者は「中国語演習・優」、後者は「中国語演習・良」になってしまう。

横浜国立大学における中国語履修者を対象とした意識調査 新沼雅代

ン」の4項目は相互に関連している(図2参照)。中国大陆では、正字を簡略化した「簡体字」という漢字を使っている。簡体字によっては、日本の常用漢字の字体と同じ(と認識しても支障がない)場合もあるし、全く異なる場合もある。また、中国語の発音が難しいことは良く知られている。ピンインとは、中国語の発音表記である。ピンインは主に子音と母音を組み合わせたアルファベットと(主に)母音の上につけられた声調符号から成る。正しい発音、聞き取りにはピンインの習得が不可欠である。ピンインの習得はとても重要であるにもかかわらず、実習を終えた時点でほとんどの履修者が身につけることができていない。原因は恐らく、中国語の4項目を一つの授業内でまとめて学習させているためだと考えられる。これは学習する側にとってとても負担が大きい。そこで、筆者は「聞く・話す」という演習で、ピンインと音に特化した演習を設定し、実習で学習した内容を発音と聞き取りの面で補うことを試みている。

同時に、実習でピンインをどのように指導するかについて考える必要がある。中国語の4項目について学習を同時に進めつつ、図2の線で結んだ各箇所(a~f)を重点的に補う学習が別途必要だと筆者は考える。また、学習者自身も、自分が今やっていることは中国語学習におけるどの部分を補おうとしているのか、認識しておくことも中国語学習において重要である。

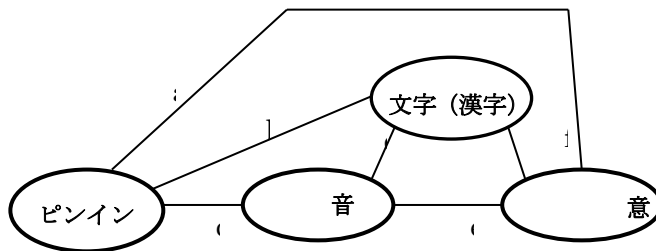


図2 中国語学習の4項目

3-4 中国語演習のまとめ

(筆者が平成23年度秋学期に担当した)中国語演習の履修者127名中115名を対象に行った質問紙調査の結果、「卒業のためにとにかく単位が必要だから」と言う気持ちで、演習を受講していたと全体の約67%が回答した(ただし、すでに指摘したようにこの回答結果にはバイアスがかかっている)。また、64%が演習は実習に比べレベルが急に上がると感じていると答えた。そして、約50%が実習の成績に基づき、演習でクラス分けをするのはよいと答え、約60%が実習と演習の履修の筋道を示した方がよいと答えた。

4. 最後に

本稿では、筆者が担当する中国語実習2aと中国語演習を、平成23年度秋学期に履修していた学生399名のうち357名を対象に意識調査を行い、その結果を報告した。多くの学生は、学習したい内容によって演習を選んでいるのではなく、専門科目等が入っていない空いた時間にとれる中国語演習を選んでいるという現状であるとはいえ、彼らは調査に協力的で、そして建設的な意見を出してくれた。中でも、ある演習履修者による「細かい文法やリスニング・会話などを勉強したい。少人数のクラスを作っ

横浜国立大学における中国語履修者を対象とした意識調査 新沼雅代

たりすることで、仲良くできたら面白い（英語のように）」というコメントが最も筆者の印象に残っている。和やかな雰囲気の中、活発に発言をすることができ、面白いと感じながら中国語を学習できたら、これに勝る効果的な学習方法はないのではないかと思う。

日本の大学における中国語教育については、個別の研究は多くなされているが、中国語教育の全体的なあり方は、英語教育や日本語教育に比べまだ整備されていない。教科書だけでなく、副教材も、中国の対外中国語教育用に作られたフラッシュカードや、ゲーム性のある CD・R 型教材など多種多様である。これらを使ってどのように教えていくかは各教員に任されている。同じ科目であってもクラス人数やクラスの雰囲気は同じではないので、効果的な授業の方法もクラスごとに異なる。本学の中国語教育において、全体的な指針が示されていれば、各教員にとって目指すものが明確になる。そうすれば各回の授業で達成するものが自ずと明確になり、その達成に効果的な授業方法を採用することにつながる。

以上のことから、筆者は本学における中国語教育の全体的なあり方を提起することと、初・中・上級レベルで学習する語彙と文法事項の目安を定めることが眼前の課題だと考える。

参考文献

『汉语动词用法词典』孟琮・郑怀德・孟庆海・蔡文兰编 商务印书馆 1999年